

# 日本の地名のアクセント型と ラテン語アクセント規則との不思議な関係について\*

太田 聡

## 1. はじめに

この小論の主な目的は、日本語の名詞——特に、地名として用いられた和語および一部は漢語——を例に、そのアクセントを決める法則には、有名なラテン語アクセント規則と驚くべき共通性があることを明らかにすることである。また、同じ法則が、英語など他の言語のアクセントの説明においても広く利用できることを示す。さらに、類型論的に異なり、系統的にも無関係な言語間のアクセント規則に共通性があることには、どのような意味合い（あるいは、認知上のメリットなど）があるのかということも考察してみたい。もちろん、普遍的側面ばかりでなく、日本語のアクセントに見られる特有性にも注目していく。

## 2. ラテン語アクセント規則

ラテン語には、単純で明快な語レベルのアクセント規則があり、それは、ラテン語の入門書や辞典などでも必ず紹介されている。以下は、水谷編（2009）からの引用である。<sup>1</sup>

- (1) i. 2音節語は、常にその最初の音節にアクセントがある。

e.g. má-ter, vó-cô

- ii. 3音節以上の語は、もし語尾から2番目の音節が長いときは、その音節にアクセントを持ち、もし短いときは、その前の音節、すなわち語尾から3番目の音節にアクセントを持つ。

e.g. vo-cá-bô, ho-nés-tus, vo-cá-ve-rit, té-ne-brae

(p. xi)

### 注

\* 本稿の執筆にあたっては、草稿の段階で編集委員の武本雅嗣氏から貴重なコメントを頂戴した。また、広島大学の松崎寛氏からは、私信にて、アクセント型の統計的データに関するありがたい情報をご提供いただいた。ここに記してお二人に感謝申し上げる。

1 ラテン語の長母音を表す場合、/ā, ē, ī.../といった具合に長音符号を付けて表すことが一般的であるが、本稿では/ā, ē, ī.../といった表記を用いる。これは単に筆者の利用しているワープロソフトのフォントの制約のためであり、特に深い意味はない。なお、アクセントのある音節は、母音の上に鋭アクセント符号（´）を付けて表した。

この(1-ii)に挙げた例の音節の長短と分節(syllabification)の仕方に関して補足的な説明をしておこう。まず、vo-cá-bôの場合には、後ろから2番目の音節の母音が長母音で長いので、そこにアクセントが与えられる。このように、長母音や二重母音を含むために音節が長い場合、その音節は「本来的に長い(long by nature)」と言う。一方、vo-câ-ve-ritでは、後ろから2番目の音節に含まれる母音が短母音であるので、そこにはアクセントが付与されず、もう1つ前にアクセントが置かれる。なお、ラテン語の分節法においては、母音間にある1つの子音は後の母音に付くように切られる。しかしながら、母音間に2つ以上の子音が存在する場合には、分節法は多少複雑で、「(2つ以上の子音のうち)最後の子音のみを後の母音に付ける。ただし、/p, b, t, d,.../などの閉鎖音もしくは/f/と流音の/l, r/の結合は分離せず、合わせて後ろの母音に付ける」という音節切りを行う。これに従えば、honestusはho-nes-tusと切られ、tenebraeはte-ne-braeとなる。この結果、ho-nés-tusは後ろから2番目が長い——母音は短くても、子音と合わせれば長い——音節になるので、そこにアクセントが付与されるが、té-ne-braeの場合には、後ろから2番目が短いので、アクセントはもう1つ前の音節に置かれる。なお、honestusの-nes-ように(母音単独ではなく、)子音が後続するおかげで音節が長いと見なされる場合には、「位置によって長い(long by position)」と言われる。

### 3. 英語の語アクセント

英語は、本来のゲルマン系の語彙の上に、ラテン系のフランス語などからアクセントパターンが異なる大量の語彙を借入して加えてきたため、語のアクセント体系が入り乱れて複雑なものになっているように見える。そのため、Jones (1960)などは「英語の語のアクセントを決める規則がない」という趣旨のことを述べている。

これに対して、Chomsky and Halle (1968)は、英語にもお馴染みのラテン語アクセント規則(以下では、Latin Accent Ruleの頭文字を取ってLARと略す)が当てはまることを論じ、英語のアクセント論に革新をもたらした。つまり、規則性がほとんどないかのように言われてきた英単語のアクセントにも、実は確かな法則が潜んでいたのである。以下の英語の名詞例に、(1)で既述のLARが適用できることを確認してみよう。

(2) ho-rí-zon, sy-nóp-sis, A-mé-ri-ca, cín-na-mon

後ろから2番目の音節が長いのでそこにアクセントが与えられるもののうち、horizonでは-ri-の母音が長い——すなわち、本来的に長い——からであり、synopsisでは-nop-が母音と(後続の)子音を合わせて長い——すなわち、位置によって長い——からである。一方、Americaやcinnamonでは、後ろから2番目の音節は短いため、後ろから3番目の音節にアクセントが配置されている。<sup>2</sup>このように、英語の場合にもLARは適用可能なのである。

注

<sup>2</sup> 英和辞典などでは、普通、A-mer-i-caという分節がなされている。これは、開音節(open syllable)では母音が長くなり、閉音節

なお、英語においては、LARがそのまま適用可能なのは名詞および（派生接尾辞の付いた）形容詞の場合である。英語の動詞や（非派生）形容詞の場合には、後ろから2番目ないし3番目の音節ではなく、一番後ろ、もしくは、後ろから2番目の音節にアクセントを取るパターンを示すので、LARをそのまま当てはめられるわけではない。<sup>3</sup>

また、英語におけるアクセントというのは強弱であるが、ラテン語のそれは音の抑揚であったと言われている。<sup>4</sup> すなわち、英語は強さアクセント（stress accent）であるのに対して、ラテン語は高さアクセント（pitch accent）であるという違いがある。しかしながら、本論では、アクセントの手段としてどのような特性により重きが置かれるかを厳密に区別・分類するようなことはせず、「音節の長短とアクセントの配置という計算の仕組み」において共通性があるか否かという観点から考察を進めていくことにする。

## 4. 日本語のアクセントの法則に関する先行研究

### 4. 1. 基本パターンと基本概念

日本語の動詞と形容詞——いわゆる用言——の場合には、そのアクセントのパターンは限定されており、以下の（3）に示したように、平板型——すなわち、ピッチが語末まで上がったままで、落ち目がないもの——か、語末から数えて2番目の拍でピッチが落ちる型のどちらかになる。<sup>5</sup> もっとも、終止形・連体形以外の活用形や、助詞・助動詞を伴ったものも挙げれば、この2種類の基本パターン以外も現れる。

(3) 動 詞：	い	く	(行く)	は	たら	く	(働く)
	た	べ	る	な	ま	け	る
形容詞：	あ	かい	(赤い)	つ	め	たい	(冷たい)
	し	ろ	い	あ	た	た	か
			(白い)				い (暖かい・温かい)

ちなみに、日本語においては、ピッチが落ちる箇所の有無によってアクセントの有無を捉える。た

注

(closed syllable) では母音が短くなる、という基準に合わせた区切り方である。たとえば、母音で終わるmeは[mi:]と母音が長くなるが、子音で終わるmetは[mi:t]ではなく[met]である。よって、Americaにおいても、A-me-ri-caでは[əmi:rika]と読まれかねないので、[əmerika]になるようにA-mer-i-caと辞書では分節されている。しかしながら、「音節」という概念を知っている英語を母語とする人に「Americaの第2音節を2回繰り返してAmericaと言ってみてください」と求めれば、「A-mer-mer-i-ca」ではなく、「A-me-me-ri-ca」という答えが返ってくる。つまり、英語母語話者の直観からすれば、A-me-ri-caという分節の方が、A-mer-i-caという切り方よりも、妥当だと思われる。そのため、(2) ではA-me-ri-caという表し方をした。

3 ラテン語のアクセントに関して補足すれば、たとえば、mo-ne-ōは「忠告する」という動詞、pe-cū-ni-aは「金銭」という名詞、in-te-grumは「完全な」という形容詞、といった具合に品詞の違いがあっても、「後ろから2番目の音節が短いので、後ろから3番目にアクセントを置く」という同じ規則がこれらに適用できるのである。

4 しかし、ラテン語のアクセントの性質は必ずしも明らかではない。有識階級のものに比べれば、卑語では強さの要素が大きかったのではないかと考えられている。また、その発展の途上で様々な変遷を経ており、他言語の影響などで、高さの要素が優勢な時期もあれば、強さの要素を増加させた時期もあった(呉(1952)を参照)。

5 本論で「日本語」と言うときには、暗黙のうちに、いわゆる標準語(東京方言)を想定しており、方言によるアクセントの違いには全く触れない。

たとえば、「たべる」であれば、「べ」から「る」に移るところでピッチが落ちるので、「『べ』に『アクセント核』がある」（「『べ』が『アクセント核』である」と言う。また、「べ」と「る」の間に「アクセントの滝」があるという比喩的な表現もなされる（ただし以下では、「……にアクセント核（滝）がある」といった述べ方を略して、単に「……にアクセントがある」と言う場合もある）。一方、「あかい」のようにピッチの降下する部分（アクセントの滝）を含まない語のアクセントは、「平板式／平板型」と呼ばれる。また、そうした語は「アクセントのない（unaccented）」語と呼ばれる場合もある。<sup>6</sup>

ところで、（3）に挙げた例に対して、「語末から数えて2番目の……」といった記述をした点に関して、付言しておきたい。たとえば、『大辞林』や『新明解国語辞典』などの国語辞典であれば、「たべる②」、「なまける③」、「はたらく④」といった具合に数字でアクセントの情報が示されている。これは、「語頭から数えて、『たべる』は2番目、『なまける』は3番目にアクセントが与えられる」ということを表している。また、「④」というのは、アクセント核がないこと、すなわち、その語のどこにもピッチの落ち目がなく、平板式になることを表している。このように、一般的な国語辞典の表記では、アクセントの位置を後ろからではなく、前から数えることで示してきた。しかしながら、上述のように、後ろからアクセントの位置を捉えれば、「たべる」と「なまける」、「しろい」と「あたたかい」などは、同じアクセントのパターンに属することが分かる。さらに、以下の名詞のアクセントの位置を考察してみよう。

（4） マクド ナ ルド、クリ ス マス、ス ト レス、ト マト

四角で囲んだ部分がアクセントを担う箇所——つまり、その直後でピッチが落ちるところ——である。この場所を、もし前から数えれば、4拍目、3拍目、2拍目、1拍目とばらばらである。が、後ろから見ていけば、どれも3番目にアクセントが与えられていることが分かる。このことを記号化して表すと、次の（5）のようになる。

（5）　・ ・ ・ ● ] ○ ○

1つの丸が1拍を意味し、アクセント核の拍とアクセントの滝を●]で表している。“・ ・ ・”はオプションの箇所の意で、そこに何拍生じるかは自由である。つまり、前方から数えると●の位置は何番目であるか決められないが、後方から数えれば3番目と定まるわけである。このように、日本語のアクセントを考察する際には、（英語やラテン語と同様に、）語末から計算する方がよりよい一般化ができることは明白である。よって、以下での日本語の語アクセントの議論では、その位置を語末から捉えていくことにする。

注

6 アクセントがある語は、ピッチが高い（起きた）状態から低い（伏せた）状態に移るので、「起伏式」と分類される。そして、ピッチの落ちる箇所が、語の先頭部分にあるのか、途中にあるのか、末尾のところにあるのかによって、「頭高型」、「中高型」、「尾高型」と下位分類される。つまり、「起伏式」の中に「頭高型」などが含まれているわけであり、「～式」という方が「～型」よりも広い概念である。しかしながら、「平板式」の場合には下位分類のしようがないので、「平板式」と「平板型」はほぼ同義で使われることが多い。

さてところで、用言の場合とは違って、名詞の場合には、 $n$ 拍 ( $n$ 音節) の語には $n+1$ 通りのアクセント型があって複雑なため、アクセントが恣意的に決まっていると言われてきた。たとえば、3音節の名詞であれば、次の(6)に挙げたように4通りのパターンを示す(“↓”はピッチがそこで落ちるということを意図している。以下では、(3)でのように語全体の高低を示す線を引かず、アクセント核(の後の滝)の位置のみを“↓”で簡略的に示すことにする。また、“↓”をどこにも付けない場合には、その語が平板型(無アクセント)であることを意味している)。

(6) い↓のち(命)      ここ↓ろ(心)      あたま↓(頭)      ひたい(額)

このように、名詞の場合にはアクセントのパターンが確かに多様で、一般化が容易ではなさそうに見える。しかしながら、名詞のアクセントに規則性が全くないわけではない。次節では、日本語の名詞アクセントに関して、これまでに行われてきた研究の中から、代表的なものを振り返ってみることにする。

#### 4. 2. 名詞アクセントの法則に関する先行研究

言語では、頻繁に使うものほど規則から外れた形に変化していて、あまり使わないものには規則がうまく当てはまる、という皮肉な(しかし理にかなった)ことがよく見られる。たとえば、英語で使用頻度の高い動詞ほど不規則変化をしているので、その形をせっせと暗記しなくてはならないのに対して、めったに出くわさない動詞の活用形では、大抵は-edを付けるだけですむ。アクセントのパターンにもこれと似たようなことが起こり、よく使う語のアクセント型の説明には意外と窮するが、あまり馴染みのない語のアクセント型は規則であっさり処理できる、ということがしばしばある。

たとえば、和語では、「さくら(桜)」、「やなぎ(柳)」、「さかな(魚)」、「すずめ(雀)」、「うさぎ(兎)」、「みやこ(都)」などのようにアクセントのない語の割合が非常に高く、また、漢語においてもアクセントのない語がかなりの割合を占める(宮島(他)編(1982)などを参照)。それゆえ、アクセントのない多くの例を前にしても、「平板式になる例が多い」という一般的傾向には気づいても、「どのようなときにどこにアクセントを与えるか」という配置の原則は見えてこない(また、「なぜアクセントがないのか」という問題に取り組むとなると、答えを出すのはたやすいことではない)。「ない」ものの中に何が「ある」のかにこだわるよりも、あっさりと、アクセントの付与された例を調べてみる方が、法則にたどり着くための近道である。

そこで、アクセント核がある起伏式の例が比較的多い外来語のパターンを取り上げてみたい。生成音韻論(generative phonology)の枠組みで最初に日本語のアクセントを分析したMcCawley(1968)は、次の(7)に挙げたような外来語のアクセントを観察して、その下の(8)に示したアクセント配置規則を述べている。<sup>7</sup>

注

7 (7)では、McCawleyの表記法をそのまま尊重して実例を挙げた。アポストロフィーはアクセント(核)がそこにあることを表す。母音単独で1音節になる箇所では、声門閉鎖音(glottal stop)の/?が母音の前に付加されている。(7)のいずれの例においても、アクセントの配置が括弧内に挙げた原語のものとは違っている——すなわち、日本語としてアクセントを計算し直している——ことに注目されたい。

(7) karikyu'ramu (currículum) do'rama (dráma) su'misu (Smíth) ?erebe'etaa (élevàtor)

(8) 最後から3番目のモーラを含む音節にアクセントを配置せよ。

(Place accent on the syllable containing the third from last mora.) (p. 134)

このように、外来語のアクセントのパターンに着目すれば、日本語の名詞のアクセント配置にも、統一的な規則が働いていることが窺えるのである。つまり、「名詞のアクセントは恣意的だ」と説明をあきらめてしまう必要はないのである。さらに、この規則(8)は、McCawleyも指摘しているように、たとえば、「あいうゝえお、かきくゝけこ、さしすゝせそ、……」のように無意味語にも当てはまることは大変興味深い。普通名詞や地名であれば、アクセント型も含めて暗記していると思われるかもしれない。しかし、様々な無意味語を作ってみて、ある規則がそれらにも適用可能であれば、それは、その規則の存在の強い証拠となる。たとえば、「あいうえお、かきくけこ、さしすせそ」から一部ずつを取り出して合わせ、「あいくせそ」という無意味語を作ると、(この無意味語を前もって暗記していたわけでは決してない人でも、)「あいくゝせそ」というアクセントを自然に付けるはずである。<sup>8</sup>

ところで、日本語アクセントのMcCawleyの定式化において、「3番目のモーラを含む音節」という具合に2種類の概念(単位)が用いられている点について補足しておく必要がある。日本人が長さを計る単位は「モーラ(=拍)」であることは疑う余地がない。よって、アクセントの定式化においても、「後ろから3番目のモーラにアクセントを付けよ」とする方がよりシンプルで良さそうである。しかし、日本語の各種アクセント辞典の解説などでもよく指摘されているように、アクセント核が特殊モーラ(すなわち、促音、長音、撥音など)にくるときは、それが1つ前にずれる。たとえば、「ソックス」の後ろから3番目のモーラは促音の「ッ」であるが、そこにアクセントを置くのは不自然であり、「ソ」にアクセント核は移る。(7)にある「エレベーター」という例でも、後ろから3番目のモーラが長音なので、後ろから4番目のモーラの「ベ」にアクセントが与えられている。したがって、モーラだけで外来語のアクセントの位置を考えると、後ろから3番目にあるものと、4番目にあるものの2種類が存在することになる。しかし、後ろから3番目のモーラを含む音節にアクセントがある——つまり、アクセントを担う単位は「音節」である——という捉え方をすれば、たとえば、「カリキュラム」の「キュ」も(後ろから数えて3番目のモーラを含む音節と言えるので)「エレベーター」の「ベー」と同じ扱いになり、これらのアクセント配置が1つの規則だけで処理できるのである。こうしたこと(や他のいくつかの証拠)から、McCawleyは、音韻上の類型論的に、日本語は(古典ラテン語(Classical Latin)などと同様に)モーラで数える音節言語(mora-counting syllable languages)の1つであると断じている。

さて、McCawleyのように2種類の単位を併用するアクセントの説明に対して、窪蘭・太田(1998)は、外国の地名のアクセント型を例に、日本語のアクセント規則は音節のみで定式化で

注

8 ただし、「あいくせそ」が平板型で読まれる可能性も否定できない。平板式アクセントについては、第6節でより詳しく議論する。

き、しかも、その規則がLARに酷似しているということを示した (Kubozono (1996) も参照)。次の (9) にいくつか典型的な例を挙げて解説しよう。

- (9) a. アーカンソー      ケンタッッキー      シンガポール      アゼルバイジャン  
 b. アフガニスタン      イスラエル      オクラホマ      ヨルダン

(9a) の例では、下線を施した後ろから2番目の音節が、撥音 (N)、促音 (Q)、長音 (R)、二重母音の第二要素 (J) が含まれる /kaN/, /taQ/, /poR/, /baJ/ という長い音節となっており、そこにアクセントが与えられている。一方、(9b) の例で下線を施した後ろから2番目の音節は、/su/, /e/, /ho/, /ru/ と短いので、もう1つ前の音節にアクセントが与えられている。つまり、(1-ii) で述べたLARがそのまま当てはまるのである。<sup>9</sup>

このように、外来語を採れば、日本語においてもLARと同じ規則が成り立つことが明らかにされてきた。しかし、和語や漢語の場合には、上述のように、アクセントのない語が多いので、LARが適用可能であるか否かに関して、明確な主張はなされてこなかった。そうした中で、Kubozono (2006) は、「(McCawley (1968) が唱えたように) 語のアクセント位置はモーラ数を数えることで決められ、名詞の場合、その基本的な位置は後ろから3番目のモーラである。そしてこのことは、外来語だけでなく、和語や漢語にも当てはまる」と述べ、「ながさき (長崎)、こいずみ (小泉)、でんき (電気)」などの固有名詞を含む例を挙げている。このKubozonoのアクセントに関する見解は、モーラという単位が日本語において重要な役割を果たしていることを示す様々な証拠を提示していく中で、簡単に述べられたに過ぎないので、音節単位で捉え直すことや、LARとの関連を論じることまでは行われていない。しかしながら、前述のように、本稿のねらいはLARが和語や漢語にも適用できるのかどうかを確かめることであるので、ラテン語や英語の場合と基準を同じにするためにも、音節単位での考察を行うことにする。<sup>10</sup>

次節では、日本の県などの名称を和語・漢語の例として採り上げて、それらにLARが適用できるのか否かを調べていく。

## 5. 和語・漢語のアクセント型——都道府県名を例に

本節では、日本の都道府県名を和語や漢語の代表的な例と見なして議論していく。次頁に掲げる一覧表は、秋永 (2001) に記載されたそうした地名のアクセント型を、記号を用いて、まとめて示したものである。この表1で使用した記号類の意味は以下の通りである。

注

9 たとえば、「アフガニスタン」や「ヨルダン」をモーラで数えると、後ろから3番目は「ス」と「ル」であり、それを含む音節も「ス」と「ル」であるので、McCawley流では「アフガニスタン」、「ヨルダン」という誤ったアクセント配置を予測する。これに対して、音節単位で捉えれば、一番後ろの音節は「タン」と「ダン」、後ろから2番目の音節は「ス」と「ル」、そしてそこが短いので、もう1つ前の「ニ」や「ヨ」がアクセントを取る、という具合に正しい予測・説明ができる。このように、音節のみに基づく規則の方がより優れた面がある。

10 LARでは正しい予測ができないが、(後ろから3番目のモーラを基準にする) McCawley方式ならば都合のよい例をあえて探せば、「がくもん (学問)」などがある。こうした例が見つかるにしても、だからといって、和語や漢語の場合には外来語のものとは異なる単位・規則を用いようとするのではなく、同じ単位・規則で一般化できるのであれば、その方がより望ましいことは確かである。

- I. 「○」はLARが当てはまることを、「×」はLARが当てはまらないことを表す。
- II. 「#」は語末部分の語境界（word boundary）を意図している。そして、たとえば「3-#」は、「アクセントの付く位置が語末から3番目の音節」であることを表している。
- III. 下つき文字の「S」と「L」はそれぞれshortとlongの略で、音節が短いことと長いことを表している。よって、たとえば「2<sub>s</sub>-#」となっていれば、後ろから2番目の短い音節にアクセントがくることを、「3<sub>L</sub>-#」は後ろから3番目の長い音節にアクセントがくることを示している。また、後ろから2番目の音節に下線を引いて「<sub>s</sub>」を付したのは、そこが短い音節である（ゆえに、アクセントはもう1つ前の音節に置かれている）ことを明示するためである。
- IV. ファイ（φ）の記号は、ピッチの落ちるところがない平板型の例であることを表す。

<表1> LARの適用可能性一覧

○	あお <u>も</u> <sub>s</sub> り	3-#	○	きよ <u>ー</u> と	2 <sub>L</sub> -#
○	い <u>わ</u> <sub>s</sub> て	3-#	○	な <u>ら</u>	2 <sub>s</sub> -#
○	あ <u>き</u> <sub>s</sub> た	3-#	○	わか <u>や</u> <sub>s</sub> ま	3-#
○	み <u>や</u> <sub>s</sub> ぎ	3-#	×	お <u>ー</u> さか	φ
○	やま <u>が</u> <sub>s</sub> た	3-#	○	ひよ <u>ー</u> ご	2 <sub>L</sub> -#
○	ふく <u>し</u> <sub>s</sub> ま	3-#	○	おか <u>や</u> <sub>s</sub> ま	3-#
○	いば <u>ら</u> <sub>s</sub> き	3-#	×	と <u>っ</u> とり	φ
○	と <u>ち</u> <sub>s</sub> ぎ	3-#	○	し <u>ま</u> <sub>s</sub> ね	3-#
○	ぐ <u>ん</u> ま	2 <sub>L</sub> -#	×	ひろ <u>し</u> ま	φ
○	さい <u>た</u> <sub>s</sub> ま	3 <sub>L</sub> -#	○	やま <u>ぐ</u> <sub>s</sub> ち	3-#
×	と <u>ー</u> きよ <u>ー</u>	φ	○	か <u>が</u> <sub>s</sub> わ	3-#
○	ち <u>ば</u>	2 <sub>s</sub> -#	×	とく <u>し</u> <sub>s</sub> ま	2 <sub>s</sub> -#
○	かな <u>が</u> <sub>s</sub> わ	3-#	○	《新は》とく <u>し</u> <sub>s</sub> ま	3-#
○	やま <u>な</u> <sub>s</sub> し	3-#	○	え <u>ひ</u> <sub>s</sub> め	3-#
○	な <u>が</u> <sub>s</sub> の	3-#	○	こ <u>ー</u> ち	2 <sub>L</sub> -#
×	に <u>ー</u> がた	φ	○	ふく <u>お</u> <sub>s</sub> か	3-#
○	と <u>や</u> <sub>s</sub> ま	3-#	○	さ <u>が</u>	2 <sub>s</sub> -#
×	い <u>し</u> かわ	φ	○	なが <u>さ</u> <sub>s</sub> き	3-#
×	ふく <u>い</u>	2 <sub>s</sub> -#	○	お <u>ー</u> い <u>た</u>	3 <sub>L</sub> -#
×	ふく <u>い</u>	φ	×	お <u>ー</u> いた	φ
○	しず <u>お</u> <sub>s</sub> か	3-#	×	く <u>ま</u> もと	φ
○	あ <u>い</u> ち	2 <sub>L</sub> -#	○	みや <u>ざ</u> <sub>s</sub> き	3-#
×	ぎ <u>ふ</u>	φ	×	か <u>ご</u> しま	φ
○	み <u>え</u>	2 <sub>s</sub> -#	×	お <u>き</u> なわ	φ
○	し <u>が</u>	2 <sub>s</sub> -#			

念のために、具体例で確認してみよう。たとえば、「3-#」となっている「わかやま」は、後ろから2番目の音節「や」が短いので、後ろから3番目の「か」にアクセントが置かれ、LARに従っている。「おーさか」は平板型になってアクセントがないので、LARに従っておらず、「φ」が付いている（長音部分は、「お」や「う」でなく、「ー」で表記した）。「ひょーご」は後ろから2番目の長い音節にアクセントを取ることで、「2<sub>L</sub>-#」と記号で表され、LARが当てはまっている（2音節語は、どのみち、最初の音節にアクセントがあれば、LARに従っていることになる）。

なお、「さいたま（埼玉）」と「あいち（愛知）」の「さい」と「あい」の部分は、二重母音が含まれる1音節（/saJ/, /aJ/）として扱っている。もし、二重母音を仮定しなければ、「さいゝたま」という（標準語としては）誤ったアクセント型を予測してしまうことに注意されたい。

さて、こうした地名のアクセントについて論じるにあたって、確認しておかなくてはならないことがある。それは、「あおもり（青森）」、「やまぐち（山口）」などの和語例や、「きょーと（京都）」、「こーち（高知）」などの漢語例は、一種の複合語と見なすべきか否かということである。

たとえば、「ほん（本）」+「たな（棚）」→「ほんだな」という具合に後半要素のはじめが濁ることが複合語の特徴の1つであるので、「やまぐち」といった読みで複合語としての性格が見て取れると主張できるかもしれない。しかしながら、連濁の有無と、単純語か複合語かという区別は、必ずしも一致するものではない。たとえば、「茨城」と「宮城」では、後者だけが連濁するので後者だけを複合語と見なせる、などということはあるまい。<sup>11</sup>

また、たとえば、「めじろ（目白）」、「あさがお（朝顔）」、「くわがた（鋤形）」などの動植物の名前は、漢字で表記したものをしながら語源を強いて意識したり、その姿を思い浮かべたりすれば、複合語のように感じられるかもしれない。が、これらは単純語のように扱われるのが普通であろう。こうしたことと同様に、本論では、地名も単純名詞的なものと見なすことにする。<sup>12</sup>そして、「青森県」や「山口市」のように「県」や「市」などが付いてはじめて複合語と考える。なお、表1の例から「ほっかいどー（北海道）」を除外したのは、この地名には「県」に相当する「道」が既に付いているので、複合語であると判断したためである。

さらに、県名に付与されたアクセント型からも、それらが複合語とは判断されていないことが窺える。後半要素が1～2モーラしかない複合名詞のアクセントは、平板型になるか（例：「むらさきいろ（紫色）」、「おんながた（女形）」、「じんじか（人事課）」、「しゅーきょーか（宗教家）」）、有アクセント（起伏式）の場合には、前半要素の最後の音節に置かれるか（例：「どーぶつゝえん（動物園）」、「しんしゝふく（紳士服）」、「せんめゝんき（洗面器）」、「かわぐちゝこ（河口湖）」）、である（平山編（1960：907ff.）、窪蘭（1995：58ff.）などを参照）。よって、もし県などの名称が複合語と判断されるのならば、「岩手、秋田、宮城、茨城、栃木、長野、島根」のアクセントは「いわゝて、あきゝた、みやゝぎ、いばらゝき、とちゝぎ、ながゝの、しまゝね」と

注

11 ちなみに、筆者は、茨城県で学生時代を過ごすことになるまでは、「茨城」が「いばらき」であるとは知らず、「いばらぎ」と読んでいた。よって、連濁の有無によって語の単一性と複合性を截然と分けられるとは思えない。

12 外国の地名においても、たとえば、PennsylvaniaやOxfordを、“Penn’s woodland”（sylvaniaは「森林」の意味）、“oxen’s ford”といった原義を考慮して複合語として扱う、などという必要はないはずである。

いう具合になってよいはずである。そうはなっていないことから、こうした地名は、複合語ではなく、単純語扱いをして差支えなからう。<sup>13</sup>

さて、上の表に挙げた都府県名において、LARが当てはまらない例の多くは、「とーきょー」や「おーさか」のような平板型アクセントの語である。LARの観点からすると、これらは例外的と思われるかもしれない。ところが、既に述べたように、日本語には平板式アクセントの語の割合が非常に多いので、その意味では、これらはむしろ日本語としてのごく普通のパターンを示しているだけとも言える（次節では、平板式アクセント語の数量的データに触れることにする）。よって、×を付けたものの中で、本当に例外的と言えるのは、「ふくゝい」と「とくしゝま」の2例だけである。なぜならば、後ろから2番目の音節が「く」、「し」と短いのに、そこにアクセントが置かれているからである。<sup>14</sup>

結局、表1に挙げた46の都府県名の46+3通りの読み方（アクセント）を検討したところ、LARがそのまま適用できたもの——すなわち、2音節語は先頭に、3音節以上の語では、後ろから2番目が長ければそこに、短ければもう1つ前に、アクセントを付与したもの——は7割強の35例であった。そして、LARに従っていないもののほとんどは、日本語ではむしろ多数派の平板型アクセントになっている例であった。よって、結論としては、日本語の和語や漢語にも、LARは十分当てはまると言明できる。

## 6. 平板式アクセントについて

### 6. 1. アクセント情報データベースから

前節で、地名の場合にも、平板式アクセントの語がかなり現れることを見た。しかし、アクセント核（滝）がどこにもない語が多いということは、不規則なことというよりも、むしろ、日本語の語アクセントの特徴の1つである。そこで、本節では、より具体的に平板型の例に関する数量的データを紹介することにする。

松崎・河野（1998：45）では、「4拍の名詞では、平板型が74%を占め、尾高型は2%にすぎない」と述べられている。この数値は、杉藤（1995）の全単語数65,928語中、名詞は56,812語——語種に関しては和語、漢語、外来語の全てが含まれる——で、さらにその中に「4拍語が22,574語あり、そのうちの16,694語が平板型であった」ということから割り出したものである（なお、これと同じ語数をまとめた表は、杉藤（1998：357）にも載っている）。

都道府県の名において一番多いのは4モーラ語である。そして、平板型になる例も4モーラ語が主で、「東京、新潟、石川、大阪、鳥取、広島、（大分）、熊本、鹿児島、沖縄」である。4モー

注

13 「青森」などの地名には、より正確には、「癒合語」——すなわち、語の分類上は複合語に属するが、2語が強固に合わさって、もはや1語のように感じられ、また、もとの語のアクセントの影響があまり見られないもの——という概念を用いるべきかもしれない。しかし、ここでの議論では、地名を複合語として扱ってアクセントを付与する必要がないということだけ確認できればよかったので、専門用語の細かな使い分けにはこだわらず、単に、単純語(的)か複合語(的)かという区別だけですませた。

14 「ふくゝい」は、「福」+「井」という複合語として扱われ、前半要素の最後にアクセントが与えられたとすればよいのかもしれない。しかし、この例だけに複合語規則を持ち出すのでは、あまりにもアドホックである。

ラ以外で平板型になる県名は「岐阜、(福井)」のみである。<sup>15</sup> よって、「ひろしま」などのアクセントが平板型になった理由の明快な説明まではできないにしても、4モーラの地名のアクセントが平板型になって現れること自体は、さほど妙なことではないのである。

ちなみに、秋永編(2001)の巻末にある「東京アクセントの習得法則」欄を見ると、どのような拍数の語が、どのアクセントになるかの割合が示されており、平板型の部分だけを抽出すると、以下ようになる。

(10) 平板型の割合

- 1 拍語： 頭高型にくらべて少なく、1拍語の約3割強。
- 2 拍語： 2拍語の2割弱で、外来語ではごく少数。
- 3 拍語： 所属語彙が多く、3拍語の優に半数をしめる。
- 4 拍語： 所属語彙が多く、4拍語の7割弱をしめる。
- 5 拍語： ……約3割弱。
- 6 拍語： 所属語彙は約2割。

やはり、平板型になるのは、4モーラの場合が特に多いことが確認できる。

6. 2. 4モーラ語の謎

正確に統計を取ったわけではないが、経験的に言えば、4モーラ語の場合には、外国の地名においても、そのアクセントが平板型になりやすい。(11a)と(11c)に示したように、4モーラよりも短い外国の地名や4モーラよりも長い外国の地名には、アクセントが与えられやすい。しかし、(11b)に挙げたように、4モーラ語になると、とたんに平板型の例が増える。何がなぜ違うのかは分からないが、「4モーラ」という長さ(の語)には、なにか他とは違う特別な振舞をする面がある。

- (11) a. タ<sub>1</sub>イ、チ<sub>1</sub>リ、ロ<sub>1</sub>シア、イ<sub>1</sub>ンド、ド<sub>1</sub>イツ、イ<sub>1</sub>ラン、カ<sub>1</sub>ナダ、ペ<sub>1</sub>ルー  
 b. アメリカ、フランス、イギリス、イタリア、ブラジル、エジプト、ベトナム  
 c. イスラ<sub>1</sub>エル、アルゼ<sub>1</sub>ンチン、インドネ<sub>1</sub>シア、オーストラ<sub>1</sub>リア、エルサルバ<sub>1</sub>ドル

もっとも、外国の地名において、たとえば「ネパ<sub>1</sub>ール」や「モン<sub>1</sub>ゴル」のように4モーラであってもアクセントを取るものや、逆に、「ブルガ<sub>1</sub>リア」や「ポルトガ<sub>1</sub>ル」のように5モーラ以上であってもアクセントを取らないものが、ないわけではない。つまり、アクセントの有無が4モーラか否かによって完全に分けられると主張したいわけではなく、大体の傾向を指摘したまでである。<sup>16</sup>

注

15 「大分」と「福井」はアクセントがあるパターンも併存するので、ここでは括弧に入れて挙げた。

16 漢語においても、「おんせい(音声)」と「おんいん(音韻)」は同じ4モーラ語なのに、前者にだけアクセントがあるという違いがあり、語の長さだけでアクセント型が決まるわけではないことは明らかである。どのような音の組み合わせになっているのかといった、分節音

関連した現象をもう1つ挙げよう。尊敬・丁寧を表す接頭辞の「お」が付加されると、アクセントが移動したり、消えたり、復活したり、ということが起こる。

- (12) ままごと → おままごと (お飯事)  
けしよー → おけしよー (お化粧)  
しごと → おしごと (お仕事)

そして、興味深いことに、「フランス」という4モーラで平板型の語も、たとえば、気取って「おフランス」と5モーラ語で口にすれば、とたんにアクセントのある語となる。やはり、「4」という長さに何らかの秘密がありそうである。

ついでながら、4モーラ(語)を表す単位名に触れておこう。日本語音韻論では、2モーラから成るまとまりを韻脚 (foot) と呼ぶ。さらに、2つの韻脚 (すなわち4モーラ) から成る韻律単位は、古典詩学や韻律学の用語を参考に、コロン (colon) と呼ばれることがある。そして、この4モーラという長さは、おそらく、2要素から成る語の場合には一番多く現れるものなので、もっとも収まりのよい——最適な (optimal) ——長さとも感じられるのであろう (Irwin (2009) などを参照)。

## 7. 補足的考察

ここまで、LARが英語および日本語のアクセント規則として有効であることを述べてきた。本節では、LARが当てはまるその他のいくつかの言語に触れ、また、語末から数えて2、3番目にアクセントを付けることのメリットなどを考察してみることにする。

世界の様々な言語のアクセントに関する従来の研究を踏まえて、そのパターンの理論化と説明を試みたHayes (1995) では、ラテン語に似たアクセント規則を持つ言語として、(英語以外に、) ス페인語、ルーマニア語、ドイツ語、レバノン・アラビア語 (Lebanese Arabic)、クラマス語 (Klamath) などが挙げられている。また、インターネット上で公開されている “The World Atlas of Language Structures Online” (<http://wals.info/>) で確認してみると、強勢 (stress) の位置が決まっている——固定強勢 (fixed stress) である——言語の中では、後ろから2番目に配置する言語の数が一番多いことが分かる。

では、なぜこのように後ろから2、3番目の音節という (ある意味では中途半端な) 位置にアク

注

---

(segment) のレベルでのより細かい検討を行えば、何らかの法則が見つかるかもしれない。なお、Kubozono (1996) は、たとえば、「アマゾン」にはアクセントがあっても、この語の最後を「ネ」に変えて、「アマゾネ」という無意味語を作ると、平板式で読まれるといった差異に注目した。そして、語末部分が、「ゾン/zoN/」のような1つの重音節 (heavy syllable) ではなく、「ゾネ/zone/」のように軽音節 (light syllable) の連続になっている場合にはアクセントがなくなりやすい、という指摘をしている (また逆に、たとえば「イギリス」の語末部分を重音節の「リー/riR/」に変えて、「イギリリー」という無意味語を作ると、それにはアクセントを付けたくなる)。このように、音節構造がアクセントに影響を与える面は確かにある。しかし、何の違いがどのようにアクセントに影響を与えるのかを詳しく検討することは、本稿の主眼からはずれるので、これ以上深入りすることは避けたい。

セントを置くことが好まれるのであろうか。これは推測に過ぎないが、語の最初や最後よりも、後ろから2、3番目の位置の方が、語の範囲やまとまりを聞く側にも認識させやすいのではないだろうか。つまり、「そろそろ終わりです」ということを伝えるシグナルを、アクセントによって発しているのだと思われる。たとえば、日本語で「アイス」→「アイスクリーム」→「アイスクリームソーダ」のように語を長くしていくとき、アクセントも後ろ側にずれていく。「アイス」という短い語であれば、いきなりアクセントが現れ、すぐに語末に達する。しかし、語が複合して長くなれば、「アイス…」の部分は平板なので、聞く側としては「まだ先がある」と予測でき、そして実際「…クリーム」と続く。さらに、「アイスクリーム…」まで平板だと、聞く側はまだ何かが続くと予期できるが、「……ソーダ」という具合にアクセント核が登場すれば、そこで1語が発し終わったと判断できる。このように、聞き手の方は、アクセントの位置によって語のまとまりをつかむことができるわけである。もし、アクセントが先頭や末尾にばかりくるのでは、心構えをする間もなく、「いきなり始まった」とか「突然終わった」というような印象を与え、聞く側の緊張も幾分増すような気がする。よって、後ろから2、3番目というのは、程よい位置なのではなかろうか。

## 8. まとめと展望

本論では、日本語の外来語のみならず、和語や漢語のアクセントの説明にもLARが有効であることを、地名のアクセント型を例にして証してきた。日本語には、アクセント核のない平板型の語が多く、それらにはLARを当てはめることはできないが、アクセントがある場合には、LARが広く適用できることが確認できた。

なお、名詞の場合、「後ろから2番目の音節が長ければそこに」というアクセント配置の原則が分かれば、たとえば、3音節語でいわゆる中高型のアクセントを持つ「たまご」のような例が少数派となった理由も見えてくるのである。後ろから2番目の「ま」は短いので、規則に従えば、「たまご」となるべきものだからである。このように、規則が明らかになれば、今後のアクセントの変化の方向を予測することなども可能となるのである。また、Hattori (1998) は、NHKの『日本語発音アクセント辞典』の旧版(1943年発行)と新版(1966年発行)などを用いて、そこに採録された語のアクセント型をつぶさに比較検討しながら、数十年のうちに起こった変化のパターンを見出している。そのパターンは大きく2通りであり、1つは(13a)のように後ろから2番目のアクセントが3番目に動くもので、もう1つは(13b)のように後ろから3番目のアクセントがなくなってしまうものである。<sup>17</sup>

### 注

17 後者の無アクセントになるパターンは、おそらく、アクセント核がより前方に移動するために生じると推察できる。すなわち、アクセントがなくなるときは、後方へではなく、前方へとアクセント核が移動するものと思われる(Tanaka (2001) の議論も参照)。たとえば、「はな」を低高のピッチで読んだだけでは「花」なのか「鼻」なのか分からないが、助詞の「が」を付加して「はなが」となれば「花」だと判断でき、「はなが」と平板になれば「鼻」と分かる。このように、日本語でアクセントがあるのかないのかを確かめるときに、いわば後ろ側へ伸ばすことで判断することがあるので、アクセントがないというのは、アクセント核が後ろ側に行き過ぎてしまった結果生じるように感じられるかもしれない。しかし、アクセントの通時的な変化などが、アクセント核の前方移動(による平板化)を示唆するのである。

- (13) a. <2 - #> → <3 - #> :  
       しなない (竹刀) → しなない  
       かくご (覚悟) → かご
- b. <3 - #> → φ :  
       りゃご (略語) → りゃご  
       きやく (規約) → きやく

このHattoriの指摘を踏まえ、変化の方向性を見定めると、平板型アクセントの例というのは、LARが当てはまらないのではなくて、元々はLARを適用できていたものがさらに変化（進化？）することによって登場した、と考えられるかもしれない。

いずれにしても、和語や漢語のアクセントパターンの考察からも、実に興味深い規則性が浮かび上がり、そして、それらは（言語の違いを超えた）普遍的な傾向や原理をも示唆してくれているのである。

#### 参考文献

- 
- 秋永一枝編 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.
- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, New York: Harper & Row.
- Hattori, Noriko (1998) "Base Transparency in Suprasegmental Changes: Ongoing Changes in Japanese and English," *Language Variation and Change* 10, 85-96.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版.
- Irwin, Mark (2009) "Prosodic Size and Rendaku Immunity," *Journal of East Asian Linguistics* 18, 179-196.
- Jones, Daniel (1960) *An Outline of English Phonetics*, 9th ed., Cambridge: Heffer.
- 窪蘭晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- Kubozono, Haruo (1996) "Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation," 『音声学会会報』 211, 71-82.
- Kubozono, Haruo (2006) "The Phonetic and Phonological Organization of Speech in Japanese," in Mineharu Nakayama et al. eds., *The Handbook of East Asian Psycholinguistics Volume II: Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press, 191-200.
- 窪蘭晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』研究社.
- 呉茂一 (1952) 『ラテン語入門』岩波書店.
- 松崎寛・河野俊之 (1998) 『よくわかる音声』アルク.
- McCawley, James (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
- 宮島達夫 (他) 編 (1982) 『図説日本語：グラフで見ることばの姿』角川書店.
- 水谷智洋編 (2009) 『羅和辞典<改訂版>』研究社.
- 杉藤美代子 (1995) 『大阪・東京アクセント音声辞典：CD-ROM』丸善株式会社.
- 杉藤美代子 (1998) 『柴田さんと今田さん (日本語音声の研究6)』和泉書院.
- Tanaka, Shin-ichi (2001) "The Emergence of the 'Unaccented': Possible Patterns and Variations in Japanese Compound Accentuation," in Jeroen M. van de Weijer and Tetsuo Nishihara eds., *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, Berlin: Mouton de Gruyter, 159-192.